

Trial & Error

No.312
November-December 2014

特集

変わりゆく風景と暮らし

～カンボジアは望むべき「豊かな未来」を目指せるか～

写真上：カンボジアとベトナムの国境。トレーラーが国境のゲート前に並ぶ。
写真下：村での植林活動では、子どもたちも苗を運ぶ手伝いをしてくれる。

変わりゆく風景と暮らし

～カンボジアは望むべき「豊かな未来」を目指せるか～

カンボジアを含む ASEAN（東南アジア諸国連合）の経済統合が 2015 年に予定されている。こうした大きな文脈の変化は、実際の現地の人々の暮らしにどのような影響を与えるのか（あるいはすでにある変化とどう関連していくのか）。今回は事業の報告とともに、今現在の風景から、カンボジアの今後の行く末を捉えようと試みた。（編集部）

ASEAN 統合はカンボジアに何をもたらすか？

カンボジア事業担当 山崎勝

■新時代を迎えるカンボジア

二〇一四年八月七日、ブノンペンのカンボジア特別法廷において、ポル・ポト派元最高幹部の又オン・チャ、キュー・サムファン両被告に終身刑が言い渡された。七九年一月七日にポル・ポト政権が崩壊してから三十五年後のことである。「歴史の清算」が進む一方で、今やカンボジアは ASEAN 諸国のなかでも経済発展が最も期待される国の一つとなった。その原動力は若い世代にある。人口の約七割は三十五歳以下、つまりポル・ポト政権崩壊後以降に生まれており、カンボジアはまさに新時代を迎えている。

今、ASEAN は、一五年からの経済統合に向けて動いている。実現すれば、人口六億人、EU 以上の人口を抱える経済圏ができる。こうした状況にあつて、今、カンボジア国内で何が起きているのか、そして、これから何が起ころうとしている

のか。今年八月に、タイ国境そしてベトナム国境を訪れた。

■タイ国境・豊富な天然資源と開発の波

カンボジア北西部アンロンベンの街から北へ約十二キロ。タイ国境にそびえる山の峠を登ると、巨大なカジノの建物が見える。かつては深い森に覆われ、ポル・ポトが九八年に最期の時を迎えたこの場所は、今はカジノと国境貿易で栄えている。日曜日の朝七時、タイとの国境のゲートが開く。日曜日と水曜日の週二日、朝七時から夜八時まで国境が開くそうだ。カンボジア人は千リエル（約三十円）を支払えばタイに入国でき、タイ側の市場で食料品や日用品を買ってカンボジアに持ち込む。こうした国境貿易で日銭を稼いで暮らしているのだ。税関の職員は、「最近ではみなカジノや貿易のことばかり、ポル・ポトのことなど皆忘れてしまったよ」と嘆いていた。

七九年にブノンペンが陥落して以来、クメール・ルージュはタイ国境付近などの森に入りゲリラ活動を展開する。九二年に UNTAC（国連カンボジア暫定統治機構）の主導で行なわれた第一回国民議会選挙にも参加せず、その後も政府との対立を続けてきた。その拠点となったのが、こうしたタイ国境の深い森に覆われた山の中である。彼らを支えたのは、豊富な天然資源である森林の木材だった。農家によれば、現在でも木材は 1m あたり三百ドルで取引されるとい

う。大きな樹木であれば、一本あたりで日本円にして数十万円から百万円以上になる。

しかし、その森も今はほとんど失われてしまった。クメール・ルージュが投降した後も、時の政権が資金源として森林を伐採し続けたからだ。世界遺産のプレアピヒア遺跡からアンロンベンの向かってタイとの国境付近を車で走ると、いわゆる「森らしい」森はほとんどなかった。

現在では森林伐採は規制されており、所々で政府や援助機関などによる森林再生のための取り組みが行なわれていた。こうした環境保護の取り組みの一方で、国土の約二割が企業による大規模な農地開発や鉱物資源開発の対象となっている。森林だけではなく、農民が耕してきた田畑も土地の登記が明確となっていないまま企業に開発許可が与えられ、各地で土地紛争が発生している。現地の人権団体は二〇〇〇年以降、約七十万人のカンボジア人が土地問題の影響を受けていると報告している。実際に JVC の活動地近くでも、田んぼの明け渡しを拒否した農民が銃撃されるとい

う事件も発生している。

■ベトナム国境・国境を越えていく人とモノ

首都ブノンペンから国道一号線をベトナム方面へ一時間ほど行くと、国道沿いに大きな建物が見える。二二年にベトナムの肥料会

※注①・The Cambodia Daily, March 10-11, 2012

※注②・Cambodian Center for Human Rights (2013) Cambodia: Land in Conflict



■タイ国境にて。国境のゲートが開くのを待つ人々。



■カンボジア地図

- ①アンロンベン
- ②ブレアビヒア遺跡
- ③ JVC 活動地 (シェムリアップ)
- ④プノンベン
- ⑤ネアックルーン
- ⑥スパイリエン
- ⑦バベット

社がカンボジアの投資会社と共同で建設した肥料工場である。カンボジアでも農業の機械化が徐々に進み、農村部でも化学肥料を取り扱つ店が増えているのだ。

さらに進むと、国道一号线はメコン川を渡る。現在はフェリーでここを渡るが、日本のODA（政府開発援助）で橋の建設が進められている。アジアハイウェイ一号线の一部をなすこの

国道一号线は、ベトナムとカンボジアを結ぶ物流の大動脈で、フェリー乗り場はトラックやバスなどで常に混雑している。フェリーを待つ車の窓越しに

ものを売る人びともよく見かける。しかし、計画通り一五年にこのネアックルーン架橋が完成すれば、こうした賑わいは懐かしい過去となるだろう。

フェリーで川を渡ってさらに車で一時間半ほど行くと、ベトナムとの国境の街スパイリエン県バベット市に至る。プノン

ペンから東に約百六十キロ、ベトナムのホーチミンから西に約八十キロに位置するこの国境の街には大きなカシノが立ち並び、日系企業も進出している。

国境では、いくつものコンテナトレーラーが列をなして通関手

続きを待つていた。かつては、国境の中間地帯で荷物をトラックからバイクに積み替える光景がよく見られたが、今ではそうした光景はない。また、近年特に増えているのが、プノンペンとホーチミンを結ぶ国際バスである。ベトナムから陸路でアンコールワットなどを訪れるなど、人の往来が活発化している。

このスパイリエン県は平たんでコメの生産が盛んな地域であるが、近くに大きな川がなく、干ばつの影響を受けやすい。近年は雨季に入ってもなかなか雨が降らず、多くの農家が不安定な農業経営に苦勞しており、工場やカシノへ働きに出る人も増えているようだ。

農村部から都市部への人の移動は、カンボジア各地で見られる傾向だ。都市人口の割合は一三年で二一・四％と年々増加しており、同時に農業人口の割合は六五％にまで下がっている。その一方で、一三年

のコメの生産量は初ベースで九百三十四万トンと九八年に比べて約二・五倍にまで増加している。こうした数字から、技術的な改善や乾季米の導入による生産量の増加も大きい。農業が

大規模集約化されてきていることがわかる。

カンボジア全体のコメの消費量は白米ベースで三百七十万トン程度（十四年）と推測され、自給率は二〇〇％程度となる。もはや貧困とは無縁であるようにも思われるが、実際にJVCが活動している農村でも、年間家族が食べるために必要なコメを確保できない農家が多い。

統計上には表れないが、多くのコメが近隣諸国へ流れていることも推測できる。

除草剤を散布することになる。それでもなぜ、直播に切り替える農家が増えているのだろうか。かつては、ご近所同士で互いに協力しあつて田植えをすることが一般的であつた。しかし最近では、賃金を支払つて田植えする人を日雇いするケースが増えている。村からの出稼ぎが増え、田植えに必要な人材が確保できないからだ。さらに、農村金融の発達に伴つて、借金を返済できずに担保とした土地を喪失する農家も増えている。裕福な農家ではより多くの労働力を必要とする一方で、田んぼを持たない家庭も出てくる。と、そもそも「お互いに協力しあつ」ことがしづらくなつてくる。こつして、出稼ぎや農村内での貧富の格差が広がること

で、村の中の相互扶助のあり方にも変化が表れてきている。

ASEAN統合に向けて
タイ、ベトナムなどと比較して、カンボジアは法整備が十分であることや高い電気料金などとともに、人材面における教育の改善が急務とされている。海外からの直接投資も増えているが、カンボジア人の人材が育たなければ、結局は単純労働力

ASEAN統合に向けて
ASEAN統合に向けて

ASEAN統合に向けて

ASEAN統合に向けて

ASEAN統合に向けて

ASEAN統合に向けて

※注③・東京日本橋を起点とし、15カ国を経由してトルコ・ブルガリア国境に至る約2万kmの道路網。

※注④・ADB Key Indicators for Asia and the Pacific 2014

※注⑤・FAO STAT

※注⑥・<http://www.indexmundi.com/agriculture/?country=kh&commodity=milled-rice&graph=domestic-consumption>



■ベトナム国境近くのカジノ。



■メコン川を渡るフェリー。

を提供するに留まっています。

さらに、昨年の選挙で野党が躍進したこともあり、労働者の最低賃金の倍増を要求するデモが各地で行なわれている。労働者の賃金が上がれば海外企業は進出をためらうかもしれないが、富裕層や中間層が増えたことで都市部の物価は上昇しており、人々の生活は苦しいままで。

一方農村では、農産物価格の上昇に期待する声もあるが、多くの零細農家は自給もままならず、食料や日用品の物価の上昇はこうした人々の生活を圧迫することになりかねない。

いずれにせよ、カンボジアの人びとは、急速に変化する社会状況や環境の変化を様々な方法で乗り越えようとしている。しかし、ほとんどの人は広い視野と長期的な戦略を持っているわけではない。ASEAN統合によるカンボジアの経済発展は、国内外の投資家にとっては魅力的であるが、今EUの分裂がささやかれる中で、政治的にも決して一枚岩ではない国同士によるASEAN統合が、この地域に暮らす六億人の人びとにとって意義のあるものとなり得るのか、保証はどこにもない。

学びと実践がうれしい——農産物加工研修——

カンボジア事務所現地代表代行 坂本貴則

「このライムの塩漬けはどうやってつくるの?」「こうして手で転がしながらね!」カンボジアの中央にあるコンボンチャム県の中心地。調味料や漬け物づくりで有名な女性がいると聞きつけ、シエムリアップ県ドンソック村から学びにきた女性たち十名の目は真剣だ。

JVCがシエムリアップ県において実施している「生態系に配慮した農業による家族経営農家の生計改善(略称CLEAN、次ページ参照)」プロジェクトのなかで、村の女性たちは採れた野菜の保存方法に悩んでいた。二〇一〇年、視察で村を訪問された日本の農家の女性が、ご自身が実践されている野菜の加工品づくりの話を村人



■皆できゅうりの漬物をつくる。

にされた。野菜を漬物にすれば長期保存できるし、普段は買っている調味料を自分たちで加工できれば支出も減らせる。こうして「農産物加工研修」の活動が始まった。

最初の二年間は、試行錯誤の連続だった。村の近くで習った漬りかたでは、味がよくなかったり、傷んでしまったりと失敗もあった。しかし、冒頭の女性から十種類以上の加工品のつくり方や成功の秘訣を聞くことができて以降、活動が軌道に乗りはじめた。

この女性グループでは、大根やきゅうり、ライムの塩漬け、大豆や魚を原料にした調味料などをつくっている。どれもカンボジアの農村の食卓にあがるものだ。

グループの女性たちは、そのうちの一人の家に集まって加工品づくりをする。農作業とは違って、皆でおしゃべりしながらできるので楽しそうだ。また、これまではあまりチャレンジする機会がなかった新しいことを学ぶことができるのも魅力だと話す。普段はほとんど村の外に出る機会がない彼女たちのような農村の女性が外から得られる情報はかなり限定的である。そうした女性たちが、「他者からものを学び、それを自分で実践する」という喜びを、この活

動を通して感じている様子が伺える。他村でこの活動を始める際には、彼女たちにも楽しさや苦労を伝えてもらっており、現在では四村にグループができています。

昨年度、ドンソック村のグループはきゅうりの塩漬けを約百キロ、ライムの塩漬けを千個以上もつくり、自家消費の他に近隣の農家へ販売もできた。村内のレストランでもライムの塩漬けと大豆の調味料を不定期に取り扱ってもっている。しかし、まだ課題も多い。自家消費を主な目的にしているため、年間の売り上げはせいぜい百五十ドルほど。加工品の原材料となるライムや大豆もまだ多くは外から買ってきている。

「今度、うちの村でもライムの樹を植えて育てることにしたのよ」という言葉を聞いた。苗木を植えてから実がなるまで、ライムは五年以上はかかる。この小さな活動が、カンボジアの農村から出稼ぎを一掃するほどの成果をあげることが、たぶんないだろう。しかし少なくとも、カンボジアの農村でつましく暮らしている農家の女性たちの目を少しでも未来に向けて、とすることはできるかもしれない、と思えた瞬間だった。

変化する村の暮らし JVC の取り組み — 八年間の成果と課題 —

カンボジア事業担当 山崎勝

■農民の生活を深く知る

近年、都市部を中心に経済発展が進むカンボジアであるが、二〇一〇年の時点でカンボジアの五歳以下の子どもの半数以上に貧血症状があり、全体の二八%が低体重であるという^{※注①}。

JVC の活動地を歩いていても、お腹が膨れた子どもや髪の毛が茶色い子どもをよく見る。栄養失調の定型的な症状である。農村部には、今もお腹を空かせた子どもたちがたくさんいるのが現状である。

〇七年よりシエムリアップ県東部で実施してきた生態系に配慮した農業と自然資源管理による生計改善 (CLEAN)^{※注②} プロジェクトは、八年目を迎えた。より多くの農家が実践できるようにと、稲作栽培の改善や野菜栽培などの活動の他、植林活動、環境教育などに取り組んできた。とくに稲作栽培の改善として進めてきた SRI (幼苗一本植えは約千世帯の農家に普及

し、また、家庭菜園も五百世帯以上の農家が実施するようになるなど、活動の成果が見え始めている。

その一方で、まだ研修に参加したことがないという農家がいることを、JVC は課題と考えている。研修に参加した上で、

それを実践するかどうかは農家が決めればよいことであるが、そもそも、JVC が農業研修を実施していることを知らない農家もいる。JVC に協力してくれる農家ボランティアや村長などを通してこうした情報を各世帯に伝えてもらっているが、世帯数が多い村もあれば、家が留守なこともある。文字を読めない人も多いことから、チラシや掲示板を使った効果的な情報伝達ができないこともある。

そこで、昨年度より活動村をそれまでの七十村から六村に絞り、できる限りスタッフが直接農家を訪問できるようにした。これまではより多くの研修を実施できるようにすることに忙し

く、じっくりと農家の話を聞いて生活を理解する時間が足りなかった。活動村を絞ったことで、農家の暮らしをより深く理解することができるようになった。

■多様な食料確保の手段

これまでの活動では、食料を確保するための手段としての「生産」、つまり農業の実践を重視してきた。しかし、農家への聞き取り調査から、森などに昔から自生している草木を多くの農家が食用としていること、そのなかには栄養価が高いものもあることが判明した。また、日常的に約七十種類の植物を食用としていることから、この地域の農家にとって「採集」による食料確保も重要であるということがわかったのである。

この「生産」と「採集」という要素を合わせ、JVC では新たな取り組みを始めている。これまで JVC が普及してきた家庭菜園では、日本で言うところの夏野菜(きゅうりやナスなど)を育てることが中心であった。これらの栽培は、常夏のカンボジアでは気候的には難しくないが、乾季の水やりは重労働である一方で、雨季の洪水で冠水してしまふなど、水の管理が容易ではない。

そこで、こうした一年草の野菜だけではなく、主に地域に自生する多年草の食用植物の栽培に取り組んでいる。農家が食用としているこうした植物を森などから採集し、試験農場で苗木をつくって、農家に配布している。これらの自生植物は、ほとんど人が管理する必要がなく、雨季の洪水にも強く、乾季の乾燥にも耐える。芽、葉、花、実などの食用部分は栄養価が高く、また、これらを庭に植えることで、農繁期に森まで採取しに行く手間もなくなる。

また、生産した農産物を長期保存し、農閑期に食用として、販売して現金収入を得たりするために、食品加工にも取り

生態系に配慮した農業による家族経営農家の生計改善プロジェクト

目的：生態系に配慮した農業と自然資源管理を通しての生計改善

地域：シエムリアップ県チークリエン郡、ソトニコム郡

対象人数：地域の農家約 1000 世帯、地域の小学校 8 校 (児童約 800 名)

期間：2013 年 4 月～ 2015 年 3 月 (第二フェーズ延長)

活動内容：生態系農業研修 (稲作、複合農業、食品加工、植林活動、森林保護、環境教育)

※注①・UNICEF Annual Report 2012 for Cambodia

※注②・Community Livelihood Improvement through Ecological Agriculture and Natural Resource Management の略。



■食用や薪など様々な用途に使える樹木を植えた菜園。



■ここが共有林であることを示す看板。

組んでいる。現在、三つの村で女性グループがつくられ、きゅうりや大根の漬物、レモンジュースを利用したお茶など様々な加工品の生産が可能になった（詳しくは四ページを参照）。

■人びとの生活を支える森

JVCの活動地であるコンサーン村には、約百二十ヘクタールの共有林があるが、これを管理するための住民森林管理委員会は長年ほとんど機能しておらず、違法な森林伐採や土砂採取が無くならない状況にあった。

そこで、JVCが委員会のメンバーと共に森林の調査を行った結果、この二十年間で約十二種の樹木が著しく減少し、そのうち四種はすでに森から消えてしまっているという衝撃的な事実が明らかになった。そこから、住民たちは共有林を守るために活動に本腰をあげた。地域の行政や警察と状況を共有し、違法伐採を取り締まるためのルール作りを始めた。森に看板を設置するなどして、この森が共有林であることを明示する取り組みも行ってきた。その結果、今では違法に木を伐採する人はいなくなった。

さらに、森林を再生するた

めの取り組みとして、荒廃してしまつた地域において「宮脇方式」と呼ばれる方法での植林を行なっている。また実験段階ではあるが、将来的に豊かな森の植生を取り戻すことができる。

また、村内での植林活動にも力を入れ、年間約一万本の木を農家と協力して植林してきた。

こうした自然資源を守るための活動には、長期的視点に立つた人材の育成が欠かせない。そこで、八つの小学校と協力して「環境教育」として、学校菜園のほか、地域美化活動、地域植林活動などを実践している。地域での植林に利用される苗木の一部を子どもたちが育てているが、この活動を通して、子どもたちは木の育て方を覚え、近くで観察することができる。植林活動の際には、その子どもたちが環境劇を披露している。こうした取り組みを見て、大人も子どもたちの豊かな将来を守ることに関心を寄せるようになる。大切なのは、「環境を守る」という漠然とした意識ではなく、目の前にいる子どもたちの「豊かな未来」という具体的なイメージなのだ。こうした活動は郡教育局からも高く評価され、他の小・中・高校などでも実施

してほしいとの要望が寄せられている。

■これからの活動

活動開始から八年になるが、村の人びとの生活状況は変化している。特に大きな変化は、これまでと比べると、農家が「スビード」を重視するようになったことである。カンボジアの農村というところ、のんびりとハンモックにぶら下がって人びとが生活をイメージされている方も多いかもれない。しかし、実際のところ、農家の人たちは忙しいのである。電気はもちろん、水道やガスコンロがない村では、水くみや薪拾いに多くの時間と労力を費やさなければならぬ。さらに、子どもたちを学校へ行かせたり、子どもが病気がかかれば病院へ行かせたため現金も必要だ。すると、農業もいかに効率よくして生産性を高めるか、という点が重要になる。農作業にかける時間や労力を減らすことができれば、他の収入を得るための取り組みに時間を使うことができる。こうした傾向は、土地をほとんど持たない貧困世帯でも見られる。

また、自然環境の変化、特に水をめぐる状況が悪化してい

ることもある。通常、カンボジアでは五月ごろから雨季になり苗床の準備と田植えが始まるが、昨今では雨がなかなか降らず、田植えが八月以降にずれ込むことも多い。そして、ようやく田植えが終わると今度は豪雨で洪水被害を受けるといふことが続いている。年間の降水量はそれほど変わらなくても、集中して雨が降ることが多くなった。

こうした農家の現状を受けて、今後は、農作業の「省力化」が重要になると考えている。「効率化」というと、大規模化・機械化を思い浮かべる方もいるかと思うが、効率化には経済面、環境面で大きなコストが伴う。一方、省力化は、より自然の力をいかした農業をすることである。また、雨季と乾季のリズムが不安定になる中で、雨季に降った雨水を乾季にいかすことができるようにすることで、水資源を有効に活用することも重要である。

農家にとっては多くのチャレンジが必要となるが、上記のような取り組みに自信を持つ農家も出てきている。今後は、こうした取り組みをさらに多くの農家に広げていきたい。

※注③・生態学者の宮脇昭氏が提唱した、植樹方法。その森を構成する多数の樹種を混植・密植することで、土地本来の自然植生を取り戻す。

この状況を終わらせるために 必要なことはなにか

エルサレム事務所現地調整員 金子 由佳

■支援内容 (7～9月の3カ月間)

摘要	概算額
医薬品(やけど用軟膏、整腸剤など)	1,573,150
避難民への衛生キット(石鹸・洗剤など)	454,400
子どもの心理ケア	41,000
飲料水 15万リットル	169,125
車両レンタル費(燃料費込)	251,910
AEI / JVC 通信費	91,800
AEI 緊急対応スタッフ人件費(8名×3カ月)	1,154,027
JVC 現地スタッフ人件費 / 交通費(2名×3カ月×3割及び5割)	880,500
合計	4,807,932

※診療所での支援対象者:3,293名、避難所での支援対象者:5,134名
※10月以降も、引き続きAEIなどと協議の上で支援を継続予定。



■九月末、ガザ地区に入り支援物資を配布する金子(写真右)。

■恐怖の軍事侵攻

「子どもが怯えて夜眠れないの」、「五歳になる孫がパニック状態で、一日中叫び続けているわ」、「目の前で人が殺されて、バラバラになってしまった」、「自宅を空爆で壊されてしまった、非常にショックだ」。この夏に起こったイスラエルによるパレスチナ・ガザ地区への大規模な軍事攻撃の間、私は毎日のように、ガザ現地の友人や、これまでガザ地区で母子保健活動を共に実施してきた現地団体「アルド・エル・インサーン(以下AEI、「人間の大地」の意)のスタッフに電話して、その切実な訴えを聞いてきた。通話口では銃撃戦の音が鳴りやまず、子どもの叫

び声が聞こえ、私自身も泣きながら話していたこともある。七月七日に始まったこの軍事攻撃は、五十一日目の八月二十六日夜、多大な被害を残してようやく長期停戦を迎えた。九月発表の国連等発表によると、この戦争でのガザ側の死者は二千百人、負傷者は一万人を超えている。停戦後ひと月が経った今でも、家屋破壊にあつたために避難生活をしている人は十万人を超えている。^{※1)}

そんな中、二十年以上にわたってパレスチナで活動してきたJVCは、AEIの要請にもとづき、空爆開始直後の七月十五日からいち早く現地の緊急支援を開始した。今回の緊急支援の呼びかけに対し、九月末までに六百三十以上の個人・団体の方から約九百二十万円の寄付をいただき、のべ八千四百人以上のガザの人々に対して、医薬品・衛生キットを配布したり、内科診療や精神面でのケアを施すことができた。この、一人からの寄付によってガザの人約十三人がこの間支えられてきたという事実は、現地で働くスタッフにとつて、また私自身にとつても、資金的な意味に留まら

ない心の支えとなっている。

■停戦と復興の狭間で

しかし、楽観視する事はできない。事実、今のガザ地区の内情を少しでも知れば、軍事攻撃前よりも厳しいガザを取り巻く現状に、どう対応するべきか? 外部者の私も戸惑う事も多い。一部報道では完全復興までにかかる年数は二十年とも言われているが、ガザ地区に搬入される物資の量と内容を厳しく制限するイスラエルの封鎖政策は緩和されず、目に見える復興はほとんど進んでいないのが現状である。

今回の軍事侵攻中、自宅を文字通りべちゃんこにされたAEIスタッフの医師は、すべてを失って、更に自身も膝を手術するほど怪我をして松葉づえをつきながら、今も懸命に人々のために働き続けている。「ガザの人々は、世界中から『どんな目にあっても我慢して、強く生きなければならぬ』と要求されているのさ」と、先日苦笑しながら私も支えられる人も被害者という極限の状態が、はたして

いつまで続くだろうか。しかし、世界はこうした状況に対してこれまで目をつぶり続けてきた。今回の軍事攻撃は、ガザが封鎖された〇七年からこれで四回目となり、人々の限界はとうに超えているように思つた。

■不条理に終止符を

冒頭に述べたような状況を思い起こせば、私たちが再びガザの将来のために働き始めることができたことそのものが、本当に奇跡のようでもある。しかし、今度こそ、このような悲劇が繰り返されないように世界中でアクションを起こさなければならぬ。ガザの人々の我慢強さをあてにして、現状を黙認してはならない。さらに言えば、今回の募金がガザの人のためになつた有り難いものである一方で、イスラエルによる破壊を、私たち一人ひとりの貴重な寄付によって償われることに憤らなければならぬ。JVCは、これからもパレスチナの人々の声を日本・世界に届けながら、封鎖・占領の終焉に向けた政策提言等も積極的に行なつていくつもりだ。

※注①・GAZA STRIP: Humanitarian Dashboard | September 2014 (UNOCHA) より。

平壤で 8 年ぶりに実現した絵画展

コリア事業担当 寺西 澄子



2006年を最後に中断していた平壤での絵画展示がこの夏開催された。昨年来の日朝政府間協議などを背景に、平壤では関係改善への期待感も靨く。ただし、政治が動いたから急に友好ムードが形になるわけではない。十数年の積み重ねを経て実現した行事を報告する。

■久しぶりに届いたメッセージ

この八月、平壤市ルンラ小^{ピョンヤン}学校で『南北コリアと日本のともだち展』の平壤バージョンを八年ぶりに開催した。展示総数・百点というささやかな展示会にもかかわらず、当日は現地メディアの取材も入って賑やかな一日となった。玄関には『朝日子ども絵画展示会』の大きな看板。会場にやってくる子どもたちに、絵の作者に向けてメッセージを書いてほしいと声をかけると、お気に入りの絵を探してきて一生懸命書いている。「あなたのかいた絵がいちばん良かったよ」「平壤にきて、いっしょに遊んだり絵をかいたりしよう」色とりどりのペンの文字から明るい気持ち伝わる。絵を見た子どもが絵の作者に感想を送る。できるだけ「双方向」の関係を築きたいと考えるともだち展の基本型だ。だが、メッセージ交換どころか展示自体も難しくなっていたのが実情でもある。平壤では〇六年に朝鮮民主主義人民共和国が核実験を行ない、日本政府が経済制裁を科した頃から絵画展が休止状態になった。その間も試行錯誤を重ねて共同制作などに取り組



■ともだち展の「卒業生」たちが経験談を話す。

んでいたが、今年は原点に戻ろうと開催を働きかけることにした。

折しも長らく無風状態が続いた日朝間において、政府間協議が継続的に行なわれる機運が見られるようになり、ルンラ小の安玉實校長も「日本との関係が進展すれば再開できると思う」と力強く答えてくれた。五月にはストックホルムで政府協議が開かれ、北朝鮮側が日本人に関する包括的な再調査を行なうことや、日本側が独自制裁を一部解除することなどを含めた合意文が発表された。日本では北朝鮮の外交的な孤立や窮状のために交渉の場に出てきている、といった面が強調されがちだが、「関係改善は良いこと」という現地の率直

な期待は日本で想像するよりもはるかに大きい。長年日朝をつないできたともだち展の再開は、象徴的な意味も込められていると感じた。

■十年を経て平壤で出会った「卒業生」たち

会期中は、日本から訪問した朝鮮学校の学生や、絵画展に出品し続けている平壤市チャンギョン小の子どもたちも来校しての交流会も行なわれた。子どもたちを前にして、三人の大学生に登場してもらった。一人は日本人学生。小学生時代から絵画展を見て「どんな子が描いているんだろう」と思いを馳せていたと話した。もう一人は在日朝鮮人の学生。小学五年で平壤を初訪問し、大学生になった今は後輩となる朝鮮学校の子どもたちを引率する立場になった。最後の一人は平壤在住。平壤外国語大学で日本語を専攻し、滞在中の通訳として同行したのだが、なんとルンラ小学校出身で絵画展が開催されていた約十年前に参加した縁があった。

今回の訪朝には大学生も同行、平壤外大の学生との交流の時間を持った。この交流は平壤外大への日本語教材支援を契機に始まり、今年で三年目となるが、参加者のうちリーダーが三名もいて、最後は涙の別れとなった。SNSやメールで連絡を取り合う時代に、またいつ会えるかもわからず連絡先も交換せずに別れる。旅先での偶然の出会いを楽しむのではなく、自分で貯めたお金で能動的に会いに行こうと決めた二回目の旅だからこそ、出会った「次」に何をすべきか、出会いをつなぎ続け広げるにはどうすべきか、真剣に向き合い悩む姿がそこにある。自分たちだけが出会うのではなく、意味がない、もっと多くの人が出会い、過去の歴史から未来まで語り合える関係になるにはどうすべきか。ともだち展と

■限られた人だけの「出会い」を超えて

今回の訪朝には大学生も同行、平壤外大の学生との交流の時間を持った。この交流は平壤外大への日本語教材支援を契機に始まり、今年で三年目となるが、参加者のうちリーダーが三名もいて、最後は涙の別れとなった。SNSやメールで連絡を取り合う時代に、またいつ会えるかもわからず連絡先も交換せずに別れる。旅先での偶然の出会いを楽しむのではなく、自分で貯めたお金で能動的に会いに行こうと決めた二回目の旅だからこそ、出会った「次」に何をすべきか、出会いをつなぎ続け広げるにはどうすべきか、真剣に向き合い悩む姿がそこにある。自分たちだけが出会うのではなく、意味がない、もっと多くの人が出会い、過去の歴史から未来まで語り合える関係になるにはどうすべきか。ともだち展という出会いの場を経て、その次のステージを考える世代が生まれている。彼らにどう応えるか、私たちの課題も尽きない。

政治力学に無垢を装う「開発」の虚構のなかで

調査研究・政策提言担当 高橋 清貴

今回は、昨年に引き続き実施したモザンビークへの調査訪問の報告となる。詳細な調査結果は別途報告にまとめるとして、ここでは今回の訪問で高橋が見てきた風景から、そこに暮らす農民たちが開発から取り残される仕組みについて考察する。(編集部)

■情報と権力の非対称性

今夏、モザンビークを再訪した。五名の日本の市民社会のメンバーで手分けをし、現地市民社会の協力を得てプロサバンナ事業の実態調査を行なった。今回の調査では、JICAにも協力・同行してもらうことで彼らの持つ情報を知ったり、彼らの農民への接し方を観察することができた。筆者も全日程でJICAが同行し、モザンビーク政府担当者との会合や事業地(農村)を訪問することができた。

今回の収穫は、事業を推進している現場コンサルタンの把握する情報が、これまでの意見交換会や公開文書から得た情報に比べ格段に多いという発見だ。当たり前と言えばそれまでだが、特に農業開発に関わる他ドナーや企業の動きが活発なことに驚いた。

農民のプロサバンナに対する根本的疑問のひとつが事業の妥当性にある。とりわけ主たるステークホルダーであるべき農民にとって、土地収奪を伴う大規模農業開発は受け入れ難い。その意味で、土地収奪を起こしている他開発や企業の動きや土地が奪われないようにするための

情報が、きちんと農民と共有されなければ、事業が妥当であるとは言えない。しかし、私たちがそうであるように、農民もまったく「無知」のままに置かれている。

政府役人やJICAが「開発」目的で村に来れば、そこでの会合は「儀式的」になることが一般的だ。「開発」がもたらす権力関係の中で農民は萎縮し、「期待」や「成果」のみを語ることになる。プロサバンナは農民が自発的につくった事業ではなく、こうした儀式的会合の下において「小農のため」とされているに過ぎない。

ある女性農民グループを訪問した時のことだ。一連の「儀式的会合」に辟易した私は「何でもない」ということを教えてくたさい」と問いかけてみた。すると、女性たちは口々に不満を話し始めた。盛り上がってきたと思った時、同行した政府農業普及員(モザンビーク人の一声。女性たちは一斉に口を閉ざしてしまった。よくある光景だろう。それだけに両者の非対称な関係は明らかだった。権力は情報格差をもたらす。それを埋めるには、情報を持つ側、すなわち政府やJICA側から働きか

けなければならない。しかし、コンサルタントやJICAは終始無言であった。「小農のため」という目的は、現場レベルで形骸化している。

JICAは終始無言であった。局長と同じように「事業の政治化」の責任を市民側に押しつけないと思っただのかどうかはわからない。しかし、この「虚構」を政府と国民が共有することが、権力者にとって望ましい

無干渉なJICAの姿勢は、ナンブーラ州農業省局長との会合でも見られた。局長は強硬なプロサバンナ推進論者である。NGOと紹介された私の面前でも、事業に反対する農民や市民社会を「事業を政治化させている」と非難するほどだ。この「正直」すぎる局長は、自分の発言こそが事業を「政治化」させていることを自覚していない。

国家が「国民」をソフトに抑圧する政治的ツールとして「開発」があり、経済的指標や技術論でその政治的意図を覆い隠す、言ってみれば「虚構」である。そして、この「虚構」を支える予定調和を乱す者を、一般的にドナーは歓迎しない。もしここに欧米ドナーが同席していたら、嘘でも「正論」を吐いて局長の発言を中和しようとするだろう。開発を「政治化」させないよう努力することこそが、公共セクターや援助専門家の役割だからだ。しかし、ここでも

この二つのエピソードが示唆するのは、この事業の問題の本質をつかみ得ていない「無垢」な日本の援助関係者の姿である。無垢を装うことで既定路線を進むという意図なのかはわからないが、無垢は無責任体系に通じる。一方で、コンサルタントは市場原理のもと自らの専門性に従って農村開発モデルを進める。政府が定める枠の中で動くしかないため農民の権利などは無視して、生産性向上や能力向上、組織強化など技術論で事業を進める。結果、農民は「開発」の客体に落とし込まれ、受け身的に契約栽培に誘われていく。日本の「無垢」が農民を追い詰めている、と言える。

「ガバナンス」である。とするならば(市民社会にとってそれは必ずしも望ましいとは限らないが)、そしてJICAが真剣にガバナンスを考えているならば、この局長の発言に介入すべきだったろう。

「開発の外に置かれる農民」

スタッフのひとりごと

イラスト かじの 倫子

歩くことが好きです。
大した目的もなくひたすら歩きます。

気仙沼事業担当
横山 和夫

今から30年以上前、地方から出てきたばかりの貧乏な学生だった頃、たまたま地図を見ていて、当時住んでいた世田谷のアパートの前を通っている水道道路（地下に水道管が通っている）をたどって北東方向にまっすぐ進むと、高円寺をぬけて当時友人の住んでいた中野駅近辺までたどり着けそうではないか、と気づきました。その距離わずか(?) 8kmあまり、1kmを15分で歩けば「2時間あれば友人宅に遊びに行ける」と思い、歩きました。どういう訳かまったく苦痛とは感じず、単純に達成感のみが得られたのです。

このような嗜好は今でもまったく変わりません。数年前には、自宅付近を流れる川沿いに北上して某ショッピングセンターまで歩きました。真夏の炎天下、途中で購入したペットボトルで水分を補給しながら、途中での昼食時間を含め、なんと往復で7時間半!この時の目的は、もちろん「買い物」です。

都心部も歩きます。昨年のお正月には友人と「初詣」と称してだらだらと歩きました。集合場所は湯島天神。手短にお参りを済ませ、次は神田明神、ちょっと主旨からは外れますが湯島聖堂を通り、飯田橋の東京



大神宮へ。以降、九段の靖国神社から半蔵門あたりを通り抜け、溜池山王の日枝神社、最後は乃木神社まで歩き、夕方の良い時間になったのでビールを飲んで解散となりました。これでも距離を調べると8km程度です。普段は電車や地下鉄で移動してしまいましたが、都心部は意外に狭いと実感します。

現在も、通勤時に時間があれば途中下車してJVCの東京事務所まで30分ほど歩くこともしばしば。そろそろ秋めいて涼しくなってきましたので、皆さんもお近くを歩いてみてはいかがでしょうか？

『戦争の現場で考えた空爆、占領、難民 —カンボジア、ベトナムからイラクまで』

熊岡路矢著／彩流社／1,900円＋税



本書は、JVC前代表理事である熊岡氏が、これまで体験した紛争地域での出来事や出会った人々とのエピソードを紹介し、また紛争の背景説明にも力点を置いた、紛争・戦争を立体的に描いた一冊である。カンボジアやイラクなどの紛争地域においては、平和主義政策を採ってきた日本国民であることと、現地住民と築き上げた良好な関係によって、活動における安全を確保することができた、と著者は主張する。

評者はカンボジアを専門としているため、ここでは主にカンボジアと関連させて本書の特色を述べたい。日本の若い世代に「カンボジア」のイメージを尋ねると、おそらく「ボランティア」「貧困」などの言葉が返ってくるだろう。カンボジアは、地球規模課題の「宝庫」であることに加え、規制が緩く活動しやすいため、学生団体を含むボランティアの活動対象地として打ってつけなのである。日本のメディアが、カンボジアという異国の地で活動する日本人を「主役」にして報じることが、若者を惹きつける一つの要因と言える。しかし、国際協力の分野で三十年間活動してきた著者は、本書のなかで、自分が「主役」になる場面はない、あくまでも主役はその国々の人なのだ、と言う。そして、それをサポートするのが外国人の役割だという徹底した軸を、本書の様々なエピソードから読み取ることができる。国際協力がより身近になった今だからこそ、ボランティア活動やNGOという存在、また自身が国際協力に携わる原点を本書を通じて考えてみるのもよいだろう。

出会った人々を通してその国を知り、その国を通して周辺国との関係や世界情勢を理解する。そして、そこに関わる日本人として日本について考える。国際協力分野に留まらない、普遍的かつ重要なテーマも、本書は提示しているように思う。

(カンボジア市民フォーラム事務局調整員／上智大学大学院博士後期課程／JVC正会員)

上村 未来

みるよむきく

JVCは、現在9の国/地域と東日本大震災被災地で活動しています。

南アフリカ



■ HIV/エイズ (リンボポ州)

7月中旬から3回に渡り、訪問介護の活動で新たなパートナーとなったチルンザナニHBCを対象に家庭菜園研修を実施し、81名が参加した。

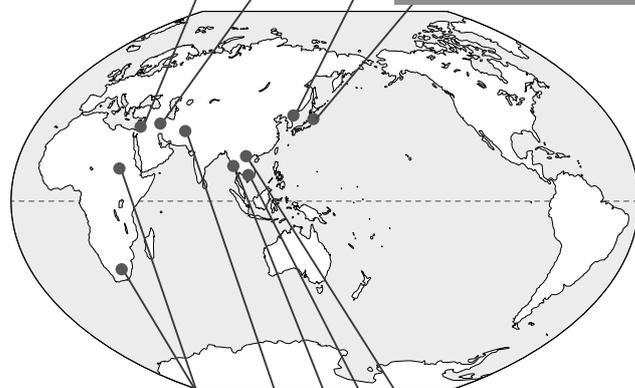
7月11日には、ヒャンガナニ村でエイズ啓発キャンペーンを実施。今まで学んだHIVに関する知識を地域住民と共有した。近隣の診療所の協力でもHIV検査も実施され、約30名が検査を受けた。

8月13～15日には、子どもケアセンターのボランティアを対象に、子どもの虐待対策についての研修を実施した。虐待の兆候の見分け方や、虐待が疑われる子どもたちへのアプローチの仕方などを学んだ。研修内では現在起きている虐待の事例をもとに解決方法を話し合う場面も見られた。

9月1～2日には日本から訪問したワンダー・アート・プロジェクトの協力の下、子どもケアセンターで人形作りにも挑戦。普段アートに触れる機会の少ない子どもたちがのびのびと創造力を発揮する機会となった。(富田)

■できた！子どもたちのアイディアが詰まった人形たち。

イラク パレスチナ



スーダン 南アフリカ アフガニスタン

ラオス カンボジア タイ

タイ



■ 農村派遣研修

タイの農村で学ぶインターンシッププログラムの国内研修を開始。8月には有機農業の基礎知識や地域開発について座学の研修を実施したほか、9月には現在の日本の農業が抱える課題やJVCのタイでの活動について講義を行なった。千葉県成田市三里塚での農業実習を2日間終え、9月7日にタイに派遣した。(下田)

■ 南タイでの医療支援活動

タイ南部バンガー県でビルマ人労働者に対して、救急医療、健康教育、健康保険証発行等の医療支援活動を実施。当期間には、12名に救急医療支援を実施し、健康教育ではデング熱、マラリア、結核、家族計画をテーマに、住民112名へ疾患予防・対策強化について取り組んだ。15名の健康保険証の発行を支援し、医療費の負担を軽減した。

(樋口)

■ JVCのタイ事業「地場の市場プロジェクト」を担当した松尾氏(左)から話を聞くインターン(右)。

ラオス



■ 農業・生活改善 / 森林保全事業 (サワナケート県)

ラオスプロジェクトでは8月が3年間の第2フェーズ・プロジェクトの中間時期であったため、中間評価が行なわれた。7月は、主に評価のための準備に時間を費やし、各活動における3年間で達成すべき指標の経過を確認するための情報収集、データ整理などを行なった。8月上旬には東京本部から副代表の磯田を迎え、中間評価における手法の確認や見直し、8月下旬には、行政への中間評価会議のため、事務局長の長谷部が初めてラオスを訪問し、評価会議を無事終えることができた。中間評価のための準備や内部評価は時間のかかる大変な作業であったが、スタッフにとってプロジェクト見直しの良い機会となり、今後のプロジェクト改善につなげたい。

9月には、各活動のフォローアップを行なった。ラタン植栽では4月に発芽研修を行なったラタンが10cmほどに育ち、一つずつ苗袋に入れる作業を行った。米銀行活動では、雨季作収穫前のこの時期が一年でもっとも米不足の期間でもあるため、多くの村人が米銀行を利用していることをフォローアップにて確認した。(林)

■ 8月27日の中間評価会議にて。

東日本大震災

■鹿折地区での復興支援 (宮城県気仙沼市)

7月18日、鹿折地区内8カ所の仮設住宅入居者を対象として、災害公営住宅入居前の顔合わせを目的とした交流イベント「あづまっぺ!『趣味のじかん』」を開催した。料理教室を実施し、25名の参加を得た。8月2、3日、県外在住の方々を対象として震災の教訓や地域資源などの魅力を伝える「みなとまつり企画～はまのがっこう in 浦島～」を開催し、11名の参加を得た。旧浦島小学校の施設利用に関する取り組みをより充実させるため、9月9日から三日間、高知県内の廃校施設の活用事例を視察した。(伊藤)

■災害FMと仮設住宅サロンの運営支援(福島県南相馬市)

福島県南相馬市での活動では引き続き地元NPO「つながっぺ南相馬」と協同で仮設住宅4カ所におけるサロン活動を実施中。本年度、住民の運動不足解消のために友伸グラウンド仮設住宅の近くに一坪菜園を開設しているが、仮設住宅住民が利用しており、8～9月には多くの夏野菜が収穫されたので、ここで採れたスイカでスイカ割りが行なわれた。

避難者支援に関わる団体間の協議の場づくりのために実施している「南相馬心のケア連絡会」の第5回目が8月に開かれた。主催はJVCと地元団体「みんなの隣組」。仮設住宅で増えるうつ病患者にどう接するべきか、など実践的な内容が話しあわれた。(白川)



■「みなとまつり企画～はまのがっこう in 浦島～」の様子。

カンボジア

■生態系に配慮した農業による生計改善 (CLEAN)

より多くの農家が収穫量を増やせられるよう稲作の改善研修を実施した。また、多年生野菜の普及を通じて、野菜を育てにくい雨季でも食べられるものを身近でつくることができるようフォローアップを行なっている(本誌特集を参照)。

■環境教育 (EE)

この時期は小学校が学年末休暇で開いていないため、先生を対象に子どもの観察力を育てるための研修を実施した。他には新学年に備えて、カリキュラムの準備やゴミ管理のための教材作りなどを行なった。また、森林管理委員会の能力強化を目的に、オドドーミエンチャイ州の森林管理委員会の活動を見学するスタディーツアーを実施した。

■資料・情報センター (TRC)

「農業と環境に関する講座」の受講者に対し、生態系農業の研修を実施した。研修を受けた後は、多年生野菜のニーズを把握するべく、プノンペンで売られている多年生野菜の種類、量、価格などの調査を実施してもらっている。

■技術学校

プノンペンにある職業訓練校と自動車整備工場の運営を支援している(経営自体はすでに独立)。学年が修了し長期休暇に入っているが、アジア開発銀行の支援の下、2カ月間の短期トレーニングを実施している。(坂本)



■スタディーツアーで森の管理について学ぶコンサエン村森林管理委員会のメンバー。

コリア

■絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』

◎韓国訪問

韓国のパートナー団体・オリニオッケドム主催の「グローバルDMZ統一キャンプ」が8月上旬、江原道麟蹄郡の韓国DMZ平和生命村において二泊三日で開催され、日本から5名の小・中学生が参加した。会場には「ともだち展」参加作品が展示され、子どもたちが出品者に感想やメッセージを送った。

◎平壤展

平壤市ルンラ小学校で8月下旬、絵画展を開催した。本年2月に東京で展示された作品を中心に100点を展示。ルンラ小の児童や関係者のほか、もう一つの参加校である平壤市チャンギョン小学校からも観覧に訪れ、日本に住む子どもたちへの手紙を書いたり、日本からの訪問者との交流会を行なった(詳細は8ページを参照)。(寺西)



■「いつか会って一緒に遊ぼうね!」(韓国での行事にて)。

スーダン

■紛争による避難民・難民への支援

スーダンの南コルドファン州および南スーダン側のスーダン難民キャンプにて支援を実施中。

南コルドファン州：避難民居住区を中心とした

給水支援では、これまでにJVCが井戸の掘削・補修を実施した地区で、住民(避難民)による維持運営の仕組みづくりを進めている。8月までにほとんどの地区で住民による「井戸管理委員会」が組織された。委員会は住民から毎月維持管理の分担金(日本円で40円程度)を集め、井戸の補修等に充当するため、積み立てている。今後、委員会メンバーを対象に点検・補修の技術研修を実施する予定である。

南スーダン：南コルドファンからの避難民7万人余を保護する難民キャンプにおいて、乳幼児のケアにあたるボランティア50名に対する研修を実施した。(今井・佐伯)



■新しく掘削された井戸で水汲みをする避難民家族(南コルドファン)。

パレスチナ

■栄養失調予防事業(ガザ)

7月8日からのイスラエルによるガザ地区への大規模軍事侵攻により、事業は一時停止したが、10月までに再開できるよう調整中である。本事業の支援対象者や現場スタッフには、幸いに死者は出ていない。



■ AEI クリニックでの診療受付の様子。

■緊急支援(ガザ)

7月15日から緊急支援を開始した。現地パートナー団体、アルド・エル・インサーン(AEI:人間の大地)のクリニックや避難所において内科診療等を実施。また、医療物資等の配布も行なった(詳細は7ページを参照)。

■学校・地域保健事業(東エルサレム)

ガザ攻撃が続く中、東エルサレムでも抗議のデモが頻発し、情勢が不安定化した。その中でも現場医療チームは、救急委員会をサポートしながら、サマーキャンプで約900人の子どもに対し、保健教育や救急法講習を実施。孤立集落の巡回診療では、515人の住民を診察し、37のケースを専門医に紹介。また、現場チームの2名が来日し、病院、小中学校、JVC事務所で研修を受け、日本の市民に対し現地の状況や活動成果を報告した。

■アドボカシー

JVC主催の講演会を計3回、他NGOとの共催イベントを計6回開催した。また、7月から激化したガザへの攻撃に関する今野と金子のインタビューが、NHK、TBS、毎日放送ラジオ、TBSラジオ、赤旗、朝日新聞、時事通信、新潟毎日新聞、埼玉新聞、週間SPA!などのメディアで取り上げられた。(今野・金子)

調査研究・政策提言

■NGO 外務省定期協議 ODA 政策協議会(7月25日)

今年度の第一回 ODA 政策協議会を外務省本省で行なった。新しく NGO 大使となった水嶋参事官を迎え、「ODA 大綱見直しにおける公開と参加」を協議事項として、プロサバンナについての報告事項などを含めて話しあった。特に、プロサバンナに関して、モザンビークのガバナンス状況の改善がなければ事業を進めないという主旨の発言が外務省からあったことは一つの成果であろう。

■モザンビーク現地調査

プロサバンナ事業の進捗と現場での問題を把握するため、7月から8月にかけて渡辺が2回、高橋が1回モザンビークを訪問し、現地調査を行なった。渡辺は、7月にモザンビーク市民社会主催の民衆会議に参加し、8月に現地市民社会に同行して現地調査を行なった。高橋は8月に、JICA との共同視察を行なった。調査結果については、今秋中に都内で報告会を行なう予定。(高橋)

アフガニスタン

■地域保健医療事業

村で健康改善に取り組む主体である保健委員会が、新たにフズ・バーク村でも結成された。すでに活動しているクズ・カシュ



■健康壁新聞を広げる教員たち。

コート村とゴレーク村での事例を参考にしながら、取り組みを進めていく。一方、母親教室を修了した女性たちも、「家族健康アクショングループ」と呼ばれる地域保健に関する行政の新しい枠組みの中で活動を開始した。地域ごとに作られるこのグループの役割は、政府が定め村人が選ぶ地域保健委員(女性)と協力して、自身が住む村で近隣の家庭を訪問し、保健省からの衛生・病気予防に関する注意事項を伝えることである。JVCはこの活動が定着するよう、定期的な集まりを開いてアドバイスを行なう。

■教育支援活動

学校の夏休み期間は、保健に関するテーマを生徒が作文し、学校の壁に貼り出すことで健康への意識を高める「健康壁新聞」のレビューを行なった。取り組んでいる6校(合計生徒数は約3,400人)から学期中に集まった作文は約350で、「薬の副作用」「不眠症の原因」「寄生虫」「歯の健康」「タバコの害」など、扱われたトピックは多岐にわたった。新学期からは作文を壁に貼るだけでなく、リーフレットにまとめて配布したり、学校の図書館に置いたりして、保健に関する知識がより伝わるよう工夫していく。

■政策提言

アメリカでの同時多発攻撃(9.11)から13年、現地スタッフが当時から今日までのアフガニスタンの経験を振り返った記事をホームページなどを通じて発信した。(加藤)

イラク

■INSAN代表のアリー・ジャバリ氏が来日

6月からの現地情勢の悪化を受け、これまでイラク北東部のキルクーク県で実施してきた「平和ワークショップ」継続の



■現地の様子と国内避難民への緊急支援を訴えるアリー氏。

可能性と、現在キルクーク県に流入している国内避難民への緊急支援に関する会議を開催するために、現地パートナー団体である INSAN 代表のアリー・ジャバリ氏を招聘した。来日中、東京、富山、新潟にて報告会を行ない、混乱する現地の様子と緊急支援の必要性について支援者や関心を持つ方々に伝えた。その中でアリー氏は、緊急救援だけでなく国内避難民の受け入れをきっかけに、地元のコミュニティと避難してきた人たちとの『融和』や『共存』を促す取り組みの必要性を訴えた。(谷山由・池田)

イベント情報

第八回

国際有機農業映画祭

今年で八回目を迎える国際有機農業映画祭は十二月十四日(日)、東京・豊島区のある武蔵大学江古田キャンパで開催されます。今年の映画祭のテーマは「流れに抗う」。グローバル化の流れは地域と自然に根ざして生きてきた小さな農業を押し流し、世界中が大規模化と効率の高さを競い合う農業一色になっています。そうした時代の流れに抗して、人と自然、ひとひとの優しい関係を取り戻す、そんな有機農業の本質を改めて考えてみたいという願いを込めて、このテーマを設定しました。



国内ひろば

JVC network

上映作品は「川は誰のものかー大川郷に鮭を待つ」『有機農業が拓く世界ーインド ティンバクトゥの挑戦』『土の讃歌』『小川町のベリカフエ』『みんな生きなければならぬ』の五本。上映の合間に、公募の三分間ビデオの上映と山形県長井市の農民、菅野芳秀さんの話を聞くトークがあります。題して「百姓が時代を創るー流れに抗って」。菅野さんは現在、地域で地元の人や土や川を生かしながら食とエネルギー、住まいの自給と経済と資源の循環を創る「自給圏づくり」の



■『有機農業が拓く地帯ーインド ティンバクトゥの挑戦』より。

運動を立ち上げています。(国際有機農業映画祭共同代表 大野和興)

- ◎参加費：一般：当日二〇〇〇円、前売り一五〇〇円。二十五歳以下：当日一〇〇〇円、前売り五〇〇円。
- ◎会場へのアクセス：池袋駅から西武池袋線で江古田駅または桜台駅下車、徒歩七分。会場は一号館B1の一〇〇二号(シアター教室)。
- ◎申し込み：国際有機農業映画祭公式ウェブサイトから、もしくはFAX：〇二〇一四六四一三三三
- ◎お問い合わせ：東京都新宿区西早稲田一〇九一九一二〇七 国際有機農業映画祭運営委員会。
メール：info@yukeiga.com

JVC国際協力コンサート2014 〜新ページをともにつくりましょう〜

今年、東京で二十六回目、大阪で二十一回目を迎えるJVC国際協力コンサート。一九八九年にこのコンサートを立上げ、以来二十五年間コンサートを実行委員長として牽引してきたアイネスM・バスカビル氏が昨年度で実行委員長を引退し、今年のコンサートは新しい歴史の一步となります。

その一歩目にふさわしく、コンサート史上最年少、そして初のスリランカ出身の指揮者となるマノイ・カンブス氏をオランダより招聘いたします。古楽界において世界的に有名な指揮者ヨス・ファン・フェルトホーフェン氏(JVCのコンサートでも九九年、〇五年で指揮)より推薦していただいた期待の若手です。若千二十六歳にして、指揮にとどまらず作曲や編曲に携わるなど、多才な音楽家として活躍されています。ソリストもオランダを中心に欧米、アジアで活躍する四人をお招きします。

事務局の私も、これまではタイ/気仙沼事業担当として、コンサートの収益を現場で活かす側でしたが、今年からは収益をつくる側になりました。このコンサートは東京、大阪の合唱団関係者、合唱団員、実行委員の皆さん他、本当に多くの方に参加していただいている事業だとあらためて実感しています。

今年の公演の音楽づくりは着々と進んでいます。いい公演にするのに必要なのは皆さんのご来場です。演奏は、演奏する人と聴く人とでつくり上げるものと言われます。ぜひ最後の仕上げにご協力いただければ嬉しいです。チケットは好評発売中。よいお席はお早目にどうぞ。(コンサート事務局 下田寛典)



- 公演情報
- 第26回東京公演
日時：2014年12月6日(土) 15時開演
会場：昭和女子大学人見記念講堂
演目：G.F.ヘンデル『メサイア』(全曲)
 - 第21回大阪公演
日時：2014年12月13日(土) 15時開演
会場：いずみホール
演目：J.S.バッハ『クリスマス・オラトリオ』(第I〜III部)、『マニフィカト』

募金にご協力ありがとうございます

JVCの活動は、皆さまの募金に支えられています。
JVCへの募金は税制優遇措置を受けることができます。

① JVC 募金（郵便振替）

JVCの各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495
加入者名：JVC 東京事務所

7月計 2,070,002 円
8月計 1,679,860 円

	7月	8月
無指定	24,227 円	107,827 円
タイ	5,000 円	5,000 円
カンボジア	14,350 円	0 円
ラオス	34,000 円	0 円
南アフリカ	3,000 円	0 円
パレスチナ	1,888,425 円	1,547,033 円
アフガニスタン	32,000 円	12,000 円
コリア	1,500 円	0 円
イラク	12,500 円	0 円
スーダン	10,000 円	0 円
東日本大震災	38,000 円	7,000 円
調査研究	7,000 円	1,000 円

※上表には「夏/冬の募金」は算入していません。

② 犬養道子「みどり一本」募金

JVC 活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号：00100-8-212497
加入者名：犬養道子「みどり一本」

7月計 116,031 円 / 11 件
8月計 31,946 円 / 6 件

③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座、クレジットカードから自動引き落としができる手軽な募金方法です。

7月入金分計 2,236,700 円 / 1,918 件
8月入金分計 2,250,700 円 / 1,925 件

編集後記

最近、本を読めていない。泡沫のような知識を求めるのならググれば十分だし、Twitter や Facebook の情報速度も有効だ。しかし、物事の解釈に、クジラが海深く潜るようにもっと時間をかけるべきだな、と感じる時がある。それには、潜るときの不安を乗り越え、海底近くで考えを耕し、そして海面に浮き上がるときの道標となるような本が読みたい、ということ。(H)

イラク事業現地パートナー招聘報告

「融和」と「共存」の取り組みを継続したい

イラク事業担当 池田 未樹

9月7日（日）から14日（日）、JVCのパートナー団体であるINSAN代表のアリー・ジャバリ氏が来日しました。

JVCは、2009年からINSANと協力し、アラブ人・クルド人・トルクメン人など多様な民族が混住するキルクークにおいて、相互理解・信頼を進めるための活動の一つとして、複数の民族や宗教の子どもたちを対象にした「平和ワークショップ」を支えてきました。今年6月からのイラク現地情勢の悪化をうけ、その継続の可能性と、戦闘地域からキルクーク県に流入している国内避難民への支援についてアリー氏と話し合いを持ちました。またアリー氏は、一般の方々向けの報告会において、混乱する現地の様子と緊急支援の必要性、さらには国内避難民の受け入れをきっかけに発生した緊張や混乱のため、地元のコミュニティと避難してきた人たちとの「融和」や「共存」を促す取り組みが必要であると訴えました。その「融和」「共存」のため、彼はこれまでの平和ワークショップをさらに拡大した“Peace Yard（平和の庭）”についての構想についても語ってくれました。

その後、昨年度からイラク事業に協力いただいている新潟平和

研究センター（CPSN）の非暴力トレーニングに参加しました。アリー氏からは、「体験したアクティビティーのいくつかは、イラクでも応用が可能」「紛争状況においては、対話、特にその対話へのプロセスがとても重要になる」と終了後に感想がありました。



■非暴力トレーニングのアクティビティーに参加するINSAN代表のアリー氏。

2014年「夏の募金」にご協力ありがとうございました！

2014年「夏の募金」集計（無指定/郵便振替分：6月～9月末）

794件 7,059,596円

- ・活動国を指定された募金は上記に含まれません。
- ・上記夏募金の金額は、ページ左上のJVC募金の欄には含まれていません。
- ・募金額の20%を管理費とさせていただきます。

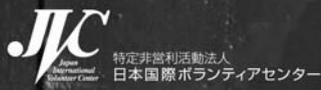
JVCウェブサイト 会員専用パスワード(2014年11月～12月)：

ePsNSGySdm

JVCウェブサイトからT&Eのバックナンバーをダウンロードするときに必要です。

JVC CALENDAR 2015 この星の旅人たち

写真 竹沢うるま
Photographs by Uruma Takezawa



好評
発売中

壁掛カレンダー	1,600円
卓上カレンダー	1,300円
ポストカード(8枚組)	600円
スマイル年賀状(10枚)	500円

JVC 国際協力カレンダー 2015 『この星の旅人たち』

写真家：竹沢うるま

2015年のカレンダーは、写真家竹沢うるま氏の協力で作成しました。ダイビングのフォトグラファーを経て、2010年に世界一周に出発した竹沢さんが3年間に渡る旅の中で撮影した写真を使用しています。一度見たら目が離せない程鮮やかで存在感のある写真が気持ちを明るく、前向きにしてくれる自信作です。収益は国内外での支援活動に活用させていただきます。皆様のご購入をお待ちしております。



日本国際ボランティアセンター(Japan International Volunteer Center)は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられるアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉や「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■ JVC では会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年6回この会報誌と年次報告書をお届けします。

- ◎一般会員 10,000円
- ◎学生会員 5,000円
- ◎団体会員 30,000円

※それぞれに正会員と賛助会員があります。入会のお申し込み、会員の方の住所変更などは会員担当の宮西へ。 → miyanishi@ngo-jvc.net

■オリエンテーション(説明会)にお越しください。

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。会場はJVC東京事務所、参加費は無料、予約不要です。

- ◎第1月曜日午後7:00 - 8:30
- ◎第2・第4土曜日午後2:00 - 3:30

■ E-mail

info@ngo-jvc.net

■ ウェブサイト

http://www.ngo-jvc.net/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

※本誌は、日本の森の間伐材を有効利用して作られた用紙「間伐材印刷用紙」(古紙90%、間伐材パルプ10%)で作成しました。



会員数(10月1日現在) 合計1,108名
(正会員 559名、賛助会員 549名)